

- ファンタジーと云ふは〇〇と見つけたり
- 見えない怪物に、あなたは何を見るのか
- アルペンルートの前
- 田舎×柴犬=最高

ファンタジーと云ふは

〇〇と見つけたり

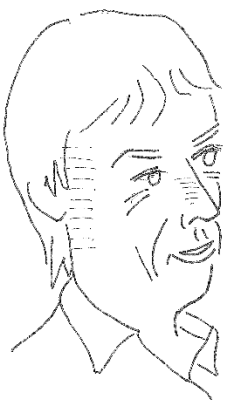
ファンタジーの醍醐味はいくつも挙げられるが、物語の舞台となる地域の魅力はその筆頭だろう。トールキン『指輪物語』を書くにあたって全身全霊をかけて中つ国を構築したわけだし、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』はそのものずばりがタイトルだ。『オズの魔法使い』のエメラルドの都は映画『ウィキッド ふたりの魔女』で再び映像化されたばかりだし、『ハリー・ポッター』のホグワーツへ行きたいと願う子どもたちはどれほどいるだろう。アーシュラ・K・ルゥグウインのライフワーク『ゲド戦記』の最終巻『火明かり』が先日待望の邦訳刊行と相成った。奥方とまじない師の策略によって大岩に変えられた領主。野に下り雌伏し、雄飛の機会を伺っていた娘と息子姉弟の復讐の顛末を描く「オドレンの娘」。ゲドが死の床で自分の来し方を朦朧とした意識に上らせている。いつしか暗い迷路のようなトンネルに迷い込むが、息を吸うことも目を覚ますこともままならない。その時彼が見たもの

とは…。シリーズの幕切れに相応しい余韻を残す「火明かり」の二篇を収録。

序文がついている。ルゥグウインがこの物語を書き始めたきっかけだ。六四年に発表した二つの短篇「名前の掟」「解放の呪文」にアースシーの世界がすでに存在していたという。「多島海（アーキペラゴ）の豊かな島々、世界の内側にある道、白い船が密集する停泊地、ハブナーの金色の屋並み」のことが。真（まこと）の名や呼び出しの呪文による死者たちの影など、後の重要なモチーフの萌芽も見えて取れる。その後編集者から若い読者向けにファンタジーを書かないかと打診を受け、本格的に『ゲド戦記』の執筆にとりかかることになるのだが、ルゥグウインが最初に行ったのは地図を描くことだった。

子どものお絵かき用の紙に描かれた大きな地図（真正正銘のアースシーのオリジナル地図。本に載っているのはそれを小さく写したものを原本としている）は最終的には失われてしまったというが（ああ、もったいない）、ルゥグウインは物語を書くとき実際にこの地図を使っていたという。「登場人物たちが航海するとすれば、島と島がどれくらい離れているのか、どちらの方角にどの島があるのか、わたしが把握していなければなりません」「物語が進んでも、訪れたことのない島や場所が「つねにありました」と語る。アースシーという地域がこれほど豊饒で、常に未知の風土や物語を感じさせるのは、ルゥグウインが探検者のように地図を見る人であったからなのだ、と納得した次第。

ルゥグウインも亡くなり、物語も出揃ってしまった。欲を言えばはてみ丸に乗って、もつとこの海を航海していたかったが、詮方無い。最初に返ってページをめくれば、若きゲドにまた会えるではないか…。



Ursula K. Le Guin

生物の博物館を巡って

一七四一年、ロシアの探検隊がアラスカに上陸。カムチャツカ半島に帰還しようとしたが、途中で嵐に遭い、無人島に上陸した。隊長に因んで、

ベーリング島と名付けられたこの島で、ステラーカイギュウは発見され、それからわずか二十七年後、人類の乱獲によって絶滅した。

『極北の海獣』は、ステラーカイギュウを中心にして、多様な自然、生態、人類による破壊と保存が描かれている。

島で寒さと飢えに苦しみながらも、博物学者ゲオルク・シュテラーは、カイギュウを解剖した。肉を剥がし、内臓を測り、骨だけを残したが、七・五メートルの巨体を船に載せることはできなかった。百年以上後、砂の中から巨大な骨が見つかり、現在はヘルシンキ自然史博物館に標本が展示されている。

この間に人類は、カイギュウ、キツネ、ラッコや鳥たちを、食や金、娯楽のために大量に殺していった。しかし、残酷なだけではない。

本書の魅力は、もういない動物たちの姿を、計測し、骨格を組立て、埃をはらい、スケッチし、紛失した部位の修復をする、そんな人々の、繊細な手作業を通して知ることができる。また、その作業に必要な、人類が積み重ねてきた自然の知識の深さに感服する。

今この瞬間にも次々と生物は絶滅し、継承されない技術もある。それでも、この本の中に、当時の自然や、人の行為や感情が、鮮明に保管されている。

詩

ミュージアムの存在を
考えてみる

『ミュージアムのふたり』の舞台は実在しない架空の土地の博物館です。学芸員の東海林文子と知り合っていない所に職を求め採用された臨時職員の武者エリカ、この二人の交流を中心に博物館での日常が描かれます。

文子は真面目、エリカはとんがった女性で正反対の印象ですが二人が少しずつ理解を深め友情を育んでいくというのが物語の中心です。

ヒューマンドラマの要素に加え、作者が元学芸員ということもあり、普段見ることのない博物館の裏側や仕事の内容に私は惹かれました。描写がとても丁寧でリアルです。博物館の学芸員は一つの建物に一人配置で良いという少なさ、展示物の配置換えにかかる苦勞、行政からの予算削減、身近の美術館や博物館で起きそうなことばかりです。施設の中にある資料は郷土の歴史として価値はあるものの集客にはつながらない。その町に経済的効果をもたらさないもので、存在すら危ぶまれる。等々。経済的な価値だけでなく文化を保存し次世代につなげるという重要な役割があることを周知する難しさがわかります。利益第一の市長さんの登場で今後の展開も気になるところです。

富山にある博物館、美術館の催事をチェックしていますが、職員の人たちの苦勞、常設展や所蔵物も気にかけてと思います。

哀

見えない怪物に、

あなたは

何を見るのか。

先日、旅行で秋田を訪れた。自然が美しく、食事と、なにより酒が旨い。一方で、ここ数年はクマの出没が相次いでおり、山野に近づくには準備が必要だ。地方に住む我々にとって、クマによる事件や事故、駆除は日常茶飯事だ。一方で、クマ保護を（しばしば過剰な態度で）訴える人もいる。だが、駆除にせよ保護にせよ、人間的な視点に寄りすぎてはいないだろうか。野生動物はもつと得体のしれないモノではないだろうか。

世間が未曾有のパンデミックに呑まれる直前の二〇一九年、北海道東部に一頭のヒグマが現れた。OSO18と名付けられたそのヒグマは、その後四年間で実に六十頭の牛を襲い、内三十二頭を喰った。

ヒグマによる事件は「三毛別ヒグマ事件」「福岡ワンダーフォーゲル部事件」などが有名だが、OSO18の得体の知れなさは、それら

とは毛色が違う。まず、まったくと言っていいほど目撃されなかった。すべての牧場から警戒され、多数のハンターや報道関係者に追われながら、である。人の目だけでなく、罾をも回避するほど知能も高い。捕らえた牛に執着しないどころか、食わずに去ることもあったことから、ハンティングを楽しんでいると評されることもあった。

『異形のヒグマ』は、謎のヒグマと、それを追うハンターたちに密着した、NHK取材班によるドキュメンタリーである。明かされるOSO18の正体は、謎と真実、その最期にいたるまで、あまりにドラマチックである。登場するハンターたちも能力や性格、立場までもがあまりに魅力的だ。著者である山森氏、有元氏の執念にも驚嘆した。まるで小説のような登場人物と事件の顛末に、ページを繰る手が止まらなくなる。

OSO18という怪物は、なぜ生まれたのか。真実は神のみぞ知るが、様々な証拠から推測することはできる。それらの根本にはやはり、人間活動が潜んでいる。解決が困難である以上、第二、第三のOSO18が誕生しても不思議ではない。しかし今、ヒグマを狩猟できるハンターはほとんど残っていないそうだ。本州でも、ツキノワグマが市街地に出没するなど、

今までの境界線が機能していない。

人間界と自然界、狩猟と保護、人間とクマ。新時代の新しい付き合い方を考える段階にあるのだ。

皿

伝承される古典怪談の

秘密がわかるかも？

怪談サークル「とうもろこしの会」会長を務める吉田悠軌の『教養としての名作怪談』は、全国各地に伝承されている古典怪談を紹介し、後のページでは独自に取材、検証し解説するという形式で書かれています。

伊豆諸島では一月二十四日の夜は外出禁止。室内では口もきかず絶対には海を見てはいけない。禁忌を破り海から来る「何か」を見たものには死が……。大島では「日忌様」、利島・新島では「海難法師」など島によって「何か」の呼び方は異なり、神津島では現在でも旧暦にその風習が色濃く残っており吉田氏が直接取材に行った様子も書かれています。当日、なぜか禁忌を破ることはできず「何か」を見ることはなかったくたりは残念です。

ただ単に怖がるだけではなく、なぜ怖いのか、を追求した古典怪談。その地域ごとの情景が浮かび、ものすごく怖いです。

拾

行ったら

終わり

タイ発ホラー映画がおもしろい。「女神の継承」「フンパヨン」に共通するのは、ある地域にのみ伝わる風習がストーリーの中心にあるということ。日本でいえば因習と呼ぶものである。横溝正史『八つ墓村』、小野不由美『屍鬼』、三津田信三『厭魅の如き憑くもの』など因習にまつわる小説はごまんとある。因習モノでは絶叫とは違う、まわりつくような不快さが表現される。

『或る集落の●』は因習ホラー短編集だ。すべてにかかわるのは青森県のP集落。この地に触れたものたちに奇奇怪怪が巻き起こる。山から集落においてくる人ならざるもの。幼い子供が山の社にひとり閉じ込められる奇妙な風習。熊穴に残された遺体。天神様への返納。ラジオ局に送られてきたクレーム。読み始めたときには、不穏なものは表れないが、読み進めると、もはやこの地に囚われ、逃げ出すことはできなくなるだろう。

悍ましい遭遇を避けるにはどうすればよいか。かの地に行かなければよいのです。行ってしまったら。もう終わりです。

熊

一言では語れない

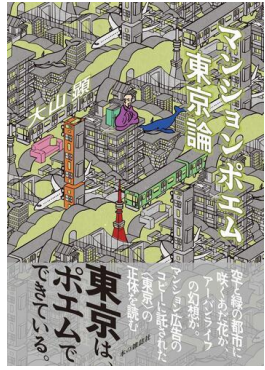
マンション広告の面白さ！

「TOKYOの主(あるじ)となる場所がある。」「都の中枢を住まう誇り」などインパクトの強い言葉が次々に飛び込んでくる。『マンションポエム東京論』では、マンション広告のコピーを何と二十年に渡って収集、観察し続けた著者の成果が記されている。

数えきれないくらいマンションポエムが出てくるが、どれも大げさな言い回しで読んでいくと笑ってしまう面白さがあつた。マンションポエムの頻出語句や特徴的な文法の分析、マンション広告のタレント起用やアニメ広告などあらゆるジャンルを網羅しているのが凄まじかった。

メインは広告の分析なのだが、東京の鉄道を語る章では、利用者にとつてどの地域までが東京なのか分析している。タワーマンションを語り尽くす章では、建築論的な話からそれを題材にしたドラマや小説の話まであり、飽きさせない語りに圧倒された。どの章でも最終的にはマンションポエムに絡めてくる徹底ぶりも良かった。合間のコラムでは、富山と金沢のマンションポエムの比較がありそんなところに着目するのかと驚いた。AIにマンション

ンボエムを書かせてみるという興味深いコラムもあった。あまりに多方面に及ぶ語りっぷりなので、思わぬ発見が多い一冊だった。 林



アルペンルートの前

富山県で育った、という人なら小学校で立山登山した思い出を持つ方も多いと思います。家族で行ったことがある方も多いでしょう。私の両親は山好きだったので周りよりもさらに多く行っていました。その際に必ずお世話になるのが、〈立山黒部アルペンルート〉。標高二四〇〇mの室堂までケーブルカーとバスで連れて行ってくれます。

私が子どものころ、すでにアルペンルートは当たり前のようにあつたのでその前の様子が全然想像できませんが、アルペンルートができる以前の立山についてまとめた本が発売されました。『立山観光ヒストリア』です。

もともと修験道の山であつた立山は、江戸時代に立山信仰の普及にともない庶民も禪定登山（道々で決められた修行をしながら登山）する山になりました。登山者が集まるに

つれ受け入れる社会基盤が發展し、明治からは近代登山が加わり、電源開発や新道建設など巻き込んでアルペンルート開業へつながっていきます。

立山の歴史が、江戸↓明治・大正↓昭和と立山がどのようにして現在の一大山岳観光地になつていったのか、一連の流れで読んでみて、思った以上にダイナミックでした。次に立山へ行くときはその歴史の痕跡を探してみようと思います。 牧



針葉樹とカモシカと

自分だけ

立山には室堂がある。白山にも室堂があるので全国津々浦々にあるものだと思ひ込んでいた。（いや山にあるのに津々浦々はないな）そんな私の最初の本格的な山歩き経験は、四十年前の夏、北アルプス五竜岳トレンギングである。素晴らしい半日だったが、今の私は平らな地面が大好きである。山ばかりの日本にいながら数回しか山を歩いていない人間がいる一方、海外から移り住み日本に上りまわっている人がい

るといふ。何と奇麗な人かと思つた。一体何が彼女を魅了したのであろうか？好奇心から『日本で山登りはじめました』を手に取つた。

著者は四年半で六百座に登つており、会社員をしながら年間八十二日を山に費やしているという。本書には北海道から鹿児島まで四十九か所の山旅日記が掲載されている。甲信越・北陸の二十か所には、剣岳・北穂高岳・白馬岳、と標高と数居高めの山々が続く中身近な存在・白山も載っている。

白山の紹介文には〈日本三大霊山のひとつと略々もつとも神様の存在を感じた〉とある。平らな大地を愛する地元民としては、神々しい空間や厳かな場所は登らなくても麓にもありますよ？とささやきたい。

神様の存在は、〈日本の山にしかない特別な何か〉七点のうちの〈地域の特性を山でも味わえる〉に入るのか？他の〈麓にいたい温泉がある〉〈地域のおいしいごはん〉とあるのは山＋温泉＋ご飯＋地酒として日本人にとつてもお楽しみセツトとなつているし、〈山がすぐそこにある〉とはつまりロープウェイやバスなどが使えることらしい。あとと三つも言われてみればそうかも、と思ふことだった。身近すぎて意識していなかったが、日本の山にしかない特別な何かは確かに存在して、海外からはとてもはつきり見えるらしい。 山

次の休みはどこに行こうか

旅は好きだ。簡単に非日常に行つた気持ちになれる。昔は田舎に住んでいるにも関わらず、秘境の温泉などによく出向いたものだ。ただし、心配性のため一人で楽しむ事はまだ出来ておらず、一人でどこへでも行ける人に憧れる。

漫画家おづまりの最新作『ゆるり愛しのひとり旅』は奈良・尾道など各地方を一人で訪れた様子をふんわりとしたイラストで描いており、憧れがいつぱいに詰まつている。

「有名カフェに行く」「パンづくしの旅」「マスキングテープを買いに行く」などイベントや有名観光地ありきでなく毎回自分だけの目的を決めて旅に出るところが斬新だ。旅に出るからには、普段行けないあれもこれもと詰め込みがちになるが、神戸に至つては観光地の紹介は一切なくひたすらにパンを食べまくる。ここまで好きを追求するにでなければ、ひとり旅でしか実現出来ないだろう。贅沢すぎる時間の使い方と思ひ切りの良さに憧れを通り過ぎて妬ましい気持ちになる。各地で食したものは、ほんわかしたイラストでたくさん描かれてい

るが、下手な写真より美味しさが伝わつてきて、あー、どこか行つてパン食したいと切実に思つた。 ぬ



されど、お菓子

旅行に行くとお土産にお菓子を購入し、周囲に配る。日本人には当たり前のようなこの習慣。だが定着したのは一九七〇年代〜八〇年代と、案外最近のようです。

まさしくこの年代、よく旅行に出かけ、ご当地お菓子を購入していた私にとつて、驚きのあまり手に取つたのが今回ご紹介する『お土産の文化人類学』。そもそも、なぜお土産を購入するのか。この問いをきっかけに、土産の主流がモノから食べ物に劇的に変化した背景や歴史、現在に至るまでの経緯を詳細に調査し、文化人類学の視点から解き明かした専門書だが、土産の歴史の奥深さを知ることが出来、また日本各地の土産文化の違いを知ることが観光の見方が変わる。旅のテキスト本としてもおすすめです。 ぬ

田舎×柴犬＝最高

人の歴史に犬の姿あり。日本においては最も古くから共生してきた犬種といえば、そう「柴犬」です。一口に柴犬といっても実は複数の種類があるのはご存じでしょうか？（柴犬）ときいてイメージされるのは信州柴と呼ばれる種で、全体の九割ほどを占めますが、他にも美濃柴や山陰柴など実は奥が深い犬種なのです。この柴犬は「柴距離」とよばれる独特の距離感・実はビビりな性格・飼い主にもツンデレなど魅力あふれる性格の持ち主です。そんな柴犬と家族との日々の暮らしがギュッとつまったエッセイ『柴犬ぼんちゃん、今日もわが道を行く』では水彩画で描かれるぼんちゃんの絶妙な表情や、「うちの犬もやるわあ」と共感させるような柴犬あるあるをお楽しみいただけます。

田舎道を逃走するぼんちゃんのに、犬飼経験者はドキドキさせられますが、同時に「たららん♪」と音がなっているような解放感にみちた後ろ姿に癒されてしまうのも止められません。



大阪弁への憧れ

「全国好きな方言調査」というものがあり、一位は圧倒的に博多弁らしいです。理由は、とにかくかわいから。「しようにと？」「しようにと？」という独特のイントネーションが魅力で、分かる気もします。しかし、個人的には、強烈な存在感と面白さを重視して大阪弁の方を推

したいです。気づくとたまに使っていますしね。「知らんがな」など大阪由来の言葉を。

『大阪ことばの謎』は、大阪人の気質、大阪弁の特徴、大阪弁に地域ごとの違いがあるのかなどを丁寧

に解説してくれます。

まず、大阪人は、会話において「正しさ」と同じくらい「楽しさ」を大事にするとのこと。本音かどうかかわからないけど会話を膨らませて、最後は適当なオチをつける。コミュニケーションにおける人との距離が近く、サービス精神が旺盛な人が多いのは確か。（おもろい大阪人）というステレオタイプには根拠と確かな文化的な背景があるようです。

そして、関西人が話す大阪弁・関西弁を特徴づけているのは、メロディとアクセント。これを真似るのが関西以外の出身の人には難しく、言葉だけを関西風にしてもエセ関西弁になるとのこと。話題になったネッ

トフリックスのドラマ「地面師たち」で、ピエール瀧（静岡出身）が演じた関西弁を話す高圧的な元司法書士のセリフ、「もうええでしよ」が、流行語になりました。騙された社長役の駿河太郎（京都出身）が、警察からの聴取の際に「胡散くさい関西弁をしゃべっていた！」と吐き捨てるシーンがありました。あれは、関西人の役者ならではの絶妙なアドリブだったのでしょうか。それを考えると味のあるシーンです。

一方で、本場の大阪弁・関西弁とは言え、地域ごとに微妙に特徴があり、近畿地方中心に旧国名でわけると見えてくること。摂津、和泉、河内、山城、紀伊、播磨、但馬など。特に兵庫県は、旧国名の5国を含んでおり、関西弁ではない地域もあるとのこと。旧国名の方が地形による分断による経済圏、人の交流圏がわかるということ。どこまでが関西なのか？これは個人的に今後、深掘りしてみたいところです。

大阪に住んだことはありませんし、今後も無いかもしれません。でも、一度ぐらい大阪に住んで、存分に生の大阪弁を浴びてみたいものです。

土地に根差して未来へ

日ごろ使用している食器は残念ながら見慣れてしまっており、特

別感や美しさなどを感じることはありません。お正月さえもプラスチック製のお重が便利と活躍の場を増やしているのが我が家の現状であります。しかし、今年のお正月はプラスチック製のお重では足りず、輪島塗のお重が十数年ぶりに目の目をみることになりました。蓋をあけた際、内側の赤が大変美しく「あゝ」と自然に声を加えるとは、こういうことなんだと実感した瞬間でした。

能登半島地震から一年半が過ぎ、輪島塗の事業再開がなかなか進まないという話もあり、気にかけていた矢先に手にしたのが、今回ご紹介する『輪島と漆』という一冊です。

輪島塗を未来へつなぐべく、工芸品として、またはアート作品として輪島塗のこれまでも今後の在り方が語られています。人間国宝・小森氏との対談では、「作家」ではなく土地と切っても切れない「職人」を育成するための課題も大いに語られており、やはり職人育成も一筋縄ではいかないことが伺えました。

しかし、事業が着々と再開し、これまでイメージしていた実用漆器としてだけでなく、新しい形で輪島塗に触れる機会が未来に増えることを心より楽しみにしたいと思います。